

1970

72 ミシエル・フーコー 『言葉と物』 英語版への序文

「英語版への序文」、『言葉と物』（ロンドン、ダヴィスタック、一九七〇年、九一―四ページ）のF・デュラン・ブゲールによる仏訳。  
《Foreword to the English Edition》（《Preface à l'édition anglaise》）；  
trad. F. Durand-Bogaert, in Foucault (M.), *The Order of Things*,  
Londres, Tavistock, 1970, pp. IX-XIV.

この序文は、おそらく「使用法」と題されるべきものである。それは読者が信用に値しないと考えるからではない。もちろん読者は、今までも十分な思いやりを持って読まれてきたこの書物を、自らの思うまま自由に読むことができる。では、私はいかなる権利をもつて、この書物には他に勝る使い方があると示唆するのだろうか。この書物を書いているとき、私には多くのことがはつきりしていなかった。その中には、あまりにも明白なことがあり、あまりにも不明瞭なことがあった。だから私は自分に言ったのだ。もし私の意図がもっと明確であり、私の企図がもっと具体化できていたならば、私の理想的な読者は以下のようにして私の書物に取り組んでいただろう、と。

1 読者はこの書物がかなりおろそかにされている領域の研究にもつぱら関わることを認識するだろう。少な

くともフランスでは、科学史と思想史において、数学、宇宙論、物理学に優位な位置が与えられている。これらの学問は、高貴なる学、厳密な学、因果性の学であり、すべては哲学に近しいものである。それらの学問の歴史では、真理と純粹理性がほとんどきれめなく現れているのを認めることができる。しかし、他の学問分野——例えば、生物、言語、経済的事実に関わる学問——は、あまりに経験的な思考に染まっており、偶然と修辭に左右されやすく、古くからの伝統と外在的な出来事に影響されると見なされている。というのも、それらの学問の歴史には規則性がないというだけではすまない何かがあると思われるからである。それらの学問に期待されているのは、せいぜい、ある精神状態に、知的意匠に、懐古主義と大胆すぎる推量や直観と無分別の入り混ざったものを証を立てることである。しかし経験的な知が、ある文化のある時代においては、実際にきわめて明確な規則性を持つていたとしたらどうだろうか。事実を記録すること、その記録された事実が納得すること、その記録が様々な伝統の中で歪められること、その記録が純粹な思弁に利用されることの可能性はどうだろうか。そしてこうしたことさえ偶然のなせる業ではなかったとしたら。間違い（そして真実）が、すなわち真正な諸発見だけでなくもつとも単純な諸概念をも含む古い信念（*croiances*）の実践が、ある時には、ある知識のコードの諸法則に従っていたとしたらどうだろうか。つまり、形式のない知の歴史にそれ自身体系があったとしたらどうだろうか。これが私の立てた最初の仮説である。言い換えれば、私が最初に負ったリスクだということになる。

2 この書物は、症候学的研究としてではなく比較研究として読まれねばならない。特定のタイプの知識や思想の総体に基づいて、ある時代を描写したり、ある世紀の精神を再構築することが、私の意図ではなかった。私が望んだのは、無数にある要素を、並べて提示することだった。すなわち、十七世紀から十九世紀にわたる時代の、生物の知、言語法則の知、経済的事実の知を、同時代の哲学的な言説に関連させることだった。それは、一般的な意味での古典主義の分析でも世界観（*Weltanschauung*）の研究でもなく、厳密な「領域」の研究である。しかし、何よりこの比較法が産み出す結果は、単独の学問分野の研究で見出される結果とたびたびきわだって異なっている（だから読者はこの書物に、言語学史、政治経済学史、哲学史と並置される生物学史を見出すこと

を期待してはならない）。重視された特定の事柄がある。聖人や英雄の歷程がいくぶん変更されているのである（*ビュフォン*よりもリンネに、*ルソー*よりもデステュット・ド・トラシに多くのスペースが割かれ、重農主義者に反対しているのはカンティヨン一人である）。境界＝領域（*frontiers*）は引き直され、通常はかけ離れている物事が密接に近づけられ、あるいは逆に密接な物事が引き離される。例えば、生物学の諸分類法を、生物の他の知識（発芽理論、動物の運動生理学、植物の静力学など）に関連づけるかわりに、言語学の記号、諸概念の形成、言語行為、需要の序列、物品の交換について同時代に言えたであろうことと比較したのである。

このことは二つの結果をもたらした。私はまず今日のわれわれすべてに馴染み深い重要な区分を捨てざるをえなかった。十七世紀と十八世紀に、十九世紀の生物学（そして哲学や経済学）の始まりを見受けることはなかった。私が目にしたのは、古典主義時代に特有な形象シグナールの出現である。例えば、当時の動植物の生理学にあった知識に大して影響されていない「分類法」や「自然史」。同時代の「政治学的な算術」の諸公準がほとんど考慮されていない「富の分析」。最後に、歴史的な分析とその際に行使される積義の働きにまったく無関係な「一般文法」。つまり、認識論的な諸形象は、それらが十九世紀に個別化され、命名されたときのように、諸学問に重ね合わせられていなかったのである。さらに、私はそれらの異なった形象の間に、伝統的な近接関係に超越する類似性のネットワークが出現しているのを見出した。古典主義時代の諸学問において、植物の分類と貨幣鑄造の理論の間に、そして属を特徴づける概念と商取引の分析の間に、考慮される対象が持つ極端な多様性を無視したような同型性（*isomorphies*）が見出されるのである。古典主義時代の知の空間は、コントやスペンサーによって体系化され、十九世紀を支配した方法とはまったく異なった方法で組織化されている。私が負った二つのリスクは、われわれの諸学問の生成だけではなく、特定の時代に関する認識論的空間を記述しようとしたこ

1 私は「思想」とか「古典主義の学問」のような用語をときどき用いるが、それらはほとんど常に考察されている特定の学問分野を指している。

とにある。

3 したがって、私は諸学問の歴史家が通常行うレベルで作業しなかった。私はそれらの歴史家が通常行う二つのレベルで作業したのだと言うべきかもしれない。というのも、一方では、学問の歴史では発見の発展、問題の定式化が迫られ、論争の衝突が記録される。また、諸理論が学問の歴史の内的な経済において分析される。要するに、学問の歴史は学問的意識進行と成果を記述する。しかし他方で、学問の歴史はその学問的意識を逃れるもの——学問の歴史が被った影響、根底に潜在する哲学、定式化されない主題系、不可視の障害——を復活させようとする。学問の歴史は学問の無意識を記述しているのである。この無意識は常に学問の否定的な側面である。この無意識は学問に抵抗し、学問を偏向させ、阻害する。しかしながら私が行いたいのは、知の実定的な無意識を明らかにすることである。この実定的な無意識の妥当性を論難し、その学問の本質を貶めようとするかわりに、学者の意識を逃れながらも一方で学的言説の一部をなすレベルを明らかにしたのである。古典主義時代の自然科学、経済学、文法に共通するものは、確かに学者の意識に存在していなかった。もしくは意識されていても表面的で限られており、ほとんど空想的なものだった。(例えばアダンソンは、植物の人為的な分類名の立案を望んだ。テュルゴは貨幣と言語を比較した。)しかし、博物学者、経済学者、文法学者は、彼ら自身は知らなかったことだが、同じ規則を用いて、自らの研究領域に適切な対象を定義し確定 (définir) し、概念を作り、理論を構築したのである。これらの研究対象、概念、理論を形成する諸規則は、決してそれ自体で定式化されたのではなく、広範囲にわたる異なる理論、概念、研究対象の中に見出されえないのである。私はそれらの諸規則を明らかにしようとしたが、それは私がおそらくはいくぶん恣意的に考古学的と呼んだレベルをそれらの具体的な位置として分離することによってである。この書物に扱われている時代を一例として挙げるならば、古典主義時代の自然科学、経済学、哲学にくまなく散らばる学問的な「表象」や「成果」の系列総体に共通する基盤や考古学的システムを確定しようとしたのである。

4 私はこの書物を開かれた場として読んでもらいたいのである。いまだ答えの見つかっていない疑問がこの

書物には展開されている。欠落しているもの多くが、初期の仕事やまだ完成されていない他の仕事、取りかかっていたさえない仕事のものに関連している。そこで、私は三つの問題設定を述べたい。

変化の問題。この書物は変化のまさにその可能性を否定するものだと言われてきた。しかし私の主要な関心は変化であった。実際、特に二つの事柄が私にショックを与えた。一つは、ある種の科学は唐突かつ完全に再組織化されること。もう一つは、明らかにひどく異なった学問分野に同時に同様の変化が起こるという事実である。(二八〇〇年あたりの)二、三年の間に、一般文法の伝統は本質的に歴史的文献学に置き換えられた。自然の分類法は比較解剖学の分析に従って秩序化された。労働と生産を主要なテーマとする政治経済学が創始された。そのような奇妙な現象の組み合わせに出会って私が思ったのは、それらの変化は連続性あるいは飛躍や視野の名の下に還元されることなく、もつと密接に検討されるべきであるということだった。異なった種類の変化が諸学問の言説のうちに起こっていると私には最初から思われていた。諸学問の変化は同じレベルでは起こらず、同じペースでは進行せず、同じ法則に従うことはない。ある特定の学問の間で新しい命題が生産され、新しい事実が分離され、新しい概念が打ち立てられる——これらの出来事は学問の日常を構成するもののだが——方法は、たぶん、新しい研究分野が出現すると同じモデルに従っていなかった(だから古い学問が消失するのとはしばしば一致して起る)。だからといって、新しい研究分野が出現することは、それまでの研究分野が一つの学問の一般形態だけではなく、知の他の領域への関わりをも変え、丸ごと区分し直されるようなことと混同してはならない。それ故、それらすべての変化を同じレベルで扱うこと、ときどき行われるようなただの一点に集約させること、個々人の才能や新たな集合的精神やひとつの発見が持つ生産性にさえ帰属させること——すなわち、それらの差異を崇めること、それらの差異をその特異性において把握することが好ましいというようなこと——は、私には行つてはならないことのように思われた。このようにして私は生物学、政治経済学、文献学、無数の人文諸科学、そして新しいタイプの哲学を特徴づける変容が、十九世紀のとは口で一致して起こり、結合しているのを記述しようとしたのである。

因果性の問題。ある一つの学問に特定の変化を引き起こすものを決定するのは必ずしも簡単ではない。そのような発見を可能にしたものは何であるのか。この新しい概念は何故現れたのか。あれやこれやの理論はどこから生じたのか。このような疑問はしばしばひどく厄介である。何故ならそのような分析を基礎づける明確な方法論の原理がないからである。その厄介さは、ある一つの学問を丸ごと変えるそれらの一般的な変化の場合には一層大きくなる。さらにいくつもの一致して起る変化ではその厄介さはより大きくなる。しかしその厄介さが最高点に達するのは経験科学の場合においてである。というのも、もろもろの器具、技術、制度、出来事、イデオロギ―、利害の役割が明らかに大きいからである。といって組成上はかなり複雑で多様な接合が実際にはどのように作用するのかわからない。さしあたり、提示することはできないと感じた解決——今でもできないと認めているが——を押し進めることは慎重さに欠けていると私には思われた。時代精神、技術的变化、社会的変化、様々な種類の影響といった伝統的に行われてきた説明の大部分が、効果的である以上にまやかに思われたのである。だからこの書物では、諸原因の問題に触れず、かわりに、変容それ自体の記述に徹することを選んだ。いつの日か学問の変化と認識論的因果性の理論が構築されたならば、こうしたことが不可欠の手続きになると考えてのことである。

主体の問題。知(すなわち学問的意識)の認識論的レベルと考古学的レベルを区別することにおいて、私は困難な道に身を投じたことを知っている。学問とその歴史(そして、それ故その学問が存在するための諸条件、その諸変化、その学問が犯してきたいろいろな失敗、その学問を新たな方向へと向かわせる突然の前進)について、学者自体に言及することなく語ることができるか(私が言っているのは、単に固有名によって代表「表象される具体的な個人ではなく、学者の仕事とその思考の特有な形式のことである」。匿名の知の総体の自発的な運動を始めから終わりまですべて妥当に辿り直す学問の歴史は試みられうるのか。「誰それはこう考えた」という伝統的な物言いを「かくかくしかじか」のことが知られている」と置き換えることは正当性を持ち、有用でさえあるのか。しかしそれは私が企図したことでは必ずしもない。知識人の伝記が持つ有効性や理論、概念、主題の歴史が

持つ可能性を否定したのではない。私は単に、そのような記述がそれ自体で十分であるのかどうか、学的言説の途方もなく高い密度を正当化するかどうか、慣習的な境界「領域の外部に、諸学問の歴史に決定的な役割を果たす規則性のシステムは存在しないのかどうか、を不思議に思ったのである。学的言説に責任を持つ主体は、その主体のいる状況に、機能に、知覚能力に、そして実践の可能性において、その主体を支配し、圧倒さえする諸条件によって決定されているのかどうかを知りたいのである。要するに、私は話している個々人の観点からでも、学者が言っていることの形式的な構造の観点からでもなく、そのような言説がまさに存在することにおいて働くようになる規則の観点から学問の言説を探求することを試みたのである。リンネ(そしてペッティやアーンルド)が、自らの言説を一般的に一貫性と真実性のあるものにするためではなく、その言説が書かれ受け入れられたときに、その言説に学問的な言説としての、より正確には博物学的な、経済学的な、文法学的な言説としての価値と実践的な適用性を与えるために満たさなければならなかった諸条件は何かということである。

この点において、大した進展がなかったことも私は充分承知している。しかし一つの方向で私の行った試みが様々に可能な取り組み方すべてを拒否するものとして受け取られたくない。一般的に言説は、特に学問の言説はとも複雑な現実を成すので、様々に異なったレベルと様々に異なった方法で取り組むことができるし、そうしなければならぬのである。しかしながら、もし私がきつぱりと拒否する一つの取り組み方があるとしたら、それは(広い意味で現象学的な取り組みと呼ぶ人がいるかもしれないが)観察する主体に絶対的な優先権を与える一つの構成的な役割をある一つの行為に帰し、あらゆる歴史性の起源にその観察主体自身の視点を据えるものである。要するに、超越的な意識を導き出す取り組み方のことである。学的言説の歴史的な分析が最後の手段として必要とするのは、知る主体の理論ではなく、むしろ言説的実践の理論であると私には思われる。

5 この最後の項目は、英語の読者に求めるものである。フランスでは、愚かな「解説者」が執拗に「構造主

1 私は以前の二つの仕事において精神医学と臨床医学に関係するこの問題に取り組んだことがある。

「義者」というレッテルを私に貼った。私はそれらの解説者の狭量な心根に、私が構造主義的分析として特徴づけられるような方法も、概念も、専門的なキーワードもまったく用いていないことを受け入れさせることができな  
いできた。

より真面目な人々が、確かに私にとって名譽ではあるのだが、しかし私が受けるに値したことの無い構造主義との結びつきから私を救ってくれるとしたら感謝するだろう。構造主義者の仕事と私自身の仕事の間には確かに類似性があるのかもしれない。私自身はまったく自覚していないが、今日行われている他人の仕事を決定的にする諸条件や諸規則から、私の言説が独立していると主張することは——他でもないこの私には——ふさわしくないだろう。しかし仰々しくはあるが不正確なレッテルを貼ることによって、そのような仕事を分析する面倒を避けることはあまりに安易でしかないのである。

### 73 第七天使をめぐる七言

「第七天使をめぐる七言」、J. P. ブリッセ「論理的文法」パリ、チュウ刊、一九七〇年、九一五七ページ。  
《Sept propos sur le septième ange》, in Brisset (J. P.), *La Grammaire logique*, Paris, Tchou, 1970, pp. 9-57.

#### I

『神の学』は、また『論理的文法』も大部分は、諸言語の起源に関する探究として呈示されている。これは何世紀ものあいだ伝統的な探究であったが、十九世紀以来少しずつ錯乱の側へと追いやられていったものである。この排除にとって一つの象徴的な日付があるとするなら、それは博学をもってなる諸学会が始原言語に捧げられた論文を拒絶した日、ということになるだろう。

だが、と或る日流刑に付されたこの長い王統系譜の中に、ブリッセは一つの特異な位置を占め、卒然と古来のしきたりに叛旗を翻す。かくも多くの温和な錯乱のただ中における、だしぬけのつむじ風。

#### II 非翻訳の原理

『神の学』の「緒言」にはこんな言葉がある、「この著作は全訳され得ない。」なぜなのか？ この断言はあらゆる言語に共通の起源を探究する人物の口から出たにしては、人を驚かせずにはおかぬものだ。その起源とは、クル・ド・ジエブランによってとりわけ名を高めた一個の伝統が想定しているように、世界中のあらゆる言語の